

[資 料]

「授業評価ツールを用いた授業改善と
そのフィードバック効果に関する一考察」

宗 田 健 一

- I. はじめに
- II. 授業評価に関する近年の動向
 - 1 教育内容等の改革状況
 - 2 授業評価の実施状況
- III. 授業評価システムとその操作方法
 - 1 授業評価ツールの概要とそのメリット・デメリット
 - 2 授業評価ツールの操作方法
- IV. アンケートの実施とその結果の分析
 - 1 アンケート方法
 - 2 主因子分析による結果とその考察
 - 3 質問項目ごとの評価結果とその考察
 - 4 授業改善方法の検討
- V. おわりに

キーワード：授業評価，授業改善，フィードバック効果，FD

I. はじめに

大学や教員は、授業の質を高める様々な取り組みを行っている。例えば、 Semester制の採用、少人数教育の実施、シラバスの作成、ティーチング・アシスタントの活用、単位の上限設定、厳格な成績評価の実施、ファカルティ・ディベロップメントの実施、及び学生への授業評価の実施などである。

とりわけ、学生への授業評価の実施を行う大学は増加しており、その評価結果は学生に対する授業の質の向上に役立ったり、大学のカリキュラム改革に反映されたりしている。実施した授業評価の結果の取り扱いは各大学により異なり、Web上（大学公式HP）で公開している大学、学内のみで公表している大学、そして自己評価に関して作成した冊子や資料を用いて公表している大学など、その開示方法は多種多様である。

しかし、基本的に授業評価の結果が評価者である学生に直接フィードバックされることは稀である。なぜなら、たいていの授業評価アンケートは、学期末や当該授業の終了時に実施されるからである。当該科目を教えている教員の授業の質が向上すると仮定したとしても、その成果は、授業評価に回答した学生達にではなく、彼らの次に受講した学生に対して反映されるのである。授業評価のフィードバックという視点から、学年末や最終授業で行われる授業評価は、評価者である学生に対して間接的な授業改善でしかないのである。

本稿では、鹿児島県立短期大学商経学科の学生を対象としたアンケート調査を基礎として、学生に対する授業評価のフィードバック効果を向上させ、教員と学生の双方向で授業改善が行われるような授業評価システムの検討を行っている。

続く第2節では、大学における教育内容等の改革状況を概観し、授業評価に関する近年の動向について検討する。第3節では、授業評価アンケートシステムの概要と操作方法を説明し、主因子法による因子分析の結果と授業改善の進展状況について考察を加えている。

II. 授業評価に関する近年の動向

1 教育内容等の改革状況

文部科学省高等教育局大学振興課の公表した「大学における教育内容等の改革状況について」(2005年3月25日)(以下、文科省[2005]とする)をもとに近年の教育面での改革動向を紹介していこう¹。

文科省[2005]では、次の5点についてその状況がまとめられていた。すなわち、①カリキュラム改革の実施状況、②授業の質を高めるための具体的な取り組み状況、③大学院の整備・充実、④単位互換、編入学等「開かれた大学」への取組状況、および⑤自己点検・評価、外部評価等の実施状況等である。上記5点のうち、本稿は、授業評価と関連する①カリキュラム改革の実施状況および②授業の質を高めるための具体的な取り組み状況の内容を概説していく。

まず、カリキュラム改革に関連した内容を見てみると、平成12年度～平成15年度(4年間)において、国立、公立、私立を含む全大学(以下、単に「全大学」とする)の553大学(約80%)、1334学部(約75%)が、カリキュラム改革を実施している。具体的には、科目区分の見直し(434大学:以下、括弧内は大学実数を示す)、くさび形教育課程²の導入(192)、必修・選択の見直し(455)、単位計算見直し(145)、コース制の導入(220)、および卒業要件単位数の見直し(212)などである。

特に情報処理教育の必修化は531大学(約77%)で行われており、674大学(約98%)で専用の教室が配備されている。また、高等学校での履修状況への配慮を行う大学が平成15年度では全大学のうち421大学(約61%)、831学部(約47%)にのぼり、補習授業の実施や既習組・未習組に分けた授業を導入する大学(学部)も増加傾向にある。

これらの事例から明らかな通り、旧来のカリキュラム体系では大学側は十分な授業を学生に提供できない場合も生じていると考えられる。

1 以下、特に断りがない場合、本節内での引用は文科省[2005]からのものである。

2 専門教育、教養教育とも4年間を通じて履修できるカリキュラムを指す(文科省[2005], 1頁)。

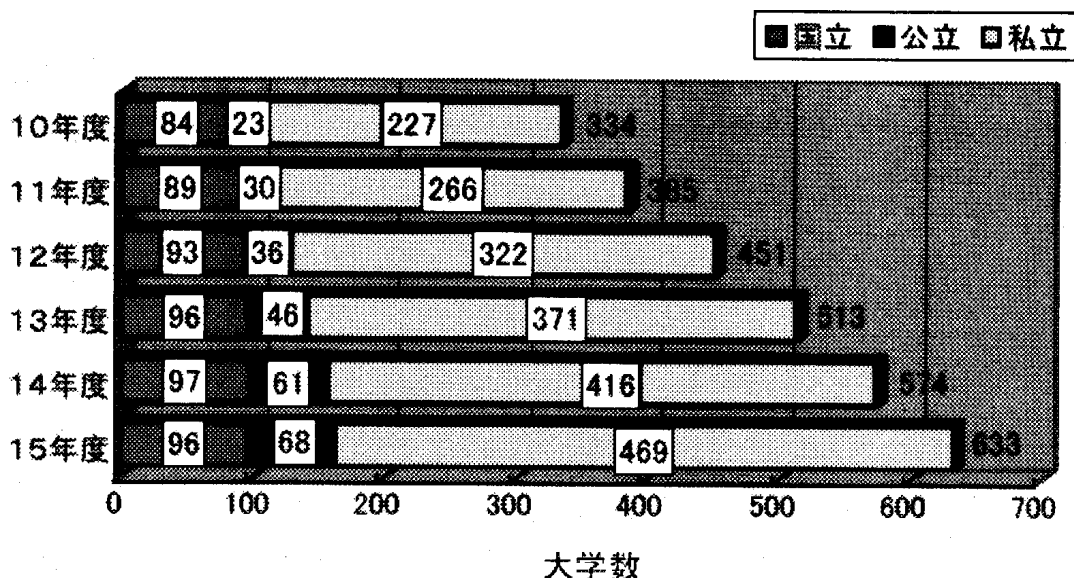
42 「授業評価ツールを用いた授業改善とそのフィードバック効果に関する一考察」

次に、授業の質を高めるための具体的な取組状況について見てみると、平成15年度現在、593大学、1533学部（約80%）で Semester制が採用されており、690大学（約99%）、1746学部（約98%）でシラバスの作成が行なわれている。また、単位の上限を設定する「キャップ制」を導入している大学は399大学（約58%）にのぼり、成績評価基準を明示した上で厳格な成績評価を行う大学は163大学（約24%）となっている。これらの事例からも明らかな通り、授業に対する形式面（カリキュラムや履修制度）のみならず実質面（授業内容とその評価）でも改革が進められている。

2 授業評価の実施状況

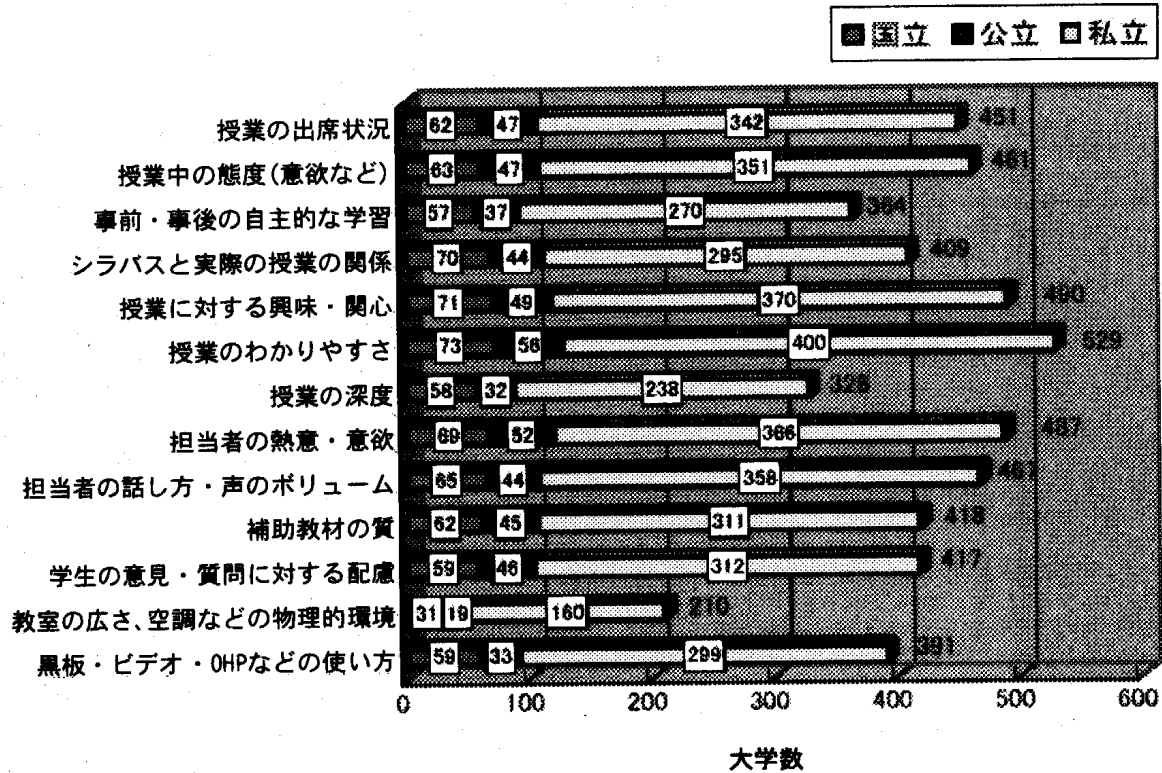
学生による授業評価の実施状況に目を移すと、平成15年度現在、633大学（約91%）で授業評価が実施されている。図表1より明らかな通り、導入大学数は増加傾向にある。全学で実施している項目について図示すると図表2の通りである。これらの項目は授業科目に左右されない基本的な質問項目であると考えられる。

図表1 学生による授業評価の実施状況



(出所) 文科省[2005], 11頁。

図表2 授業評価における評価項目



(出所) 文科省[2005], 11頁。

学生による授業評価の結果を学内の改革に反映させる組織的な取組を行っている大学は、268大学(約38%)であり、次の事例がある。

例えば、獨協大学は、全学部・学科で開講されている全科目を対象として、春学期・秋学期の年2回、マークシートによる授業評価と自由記述を併用して実施している。また、全学的に行われる授業評価とは別に、各学部・学科がそれぞれ独自の自己点検を実施している。さらに、各教員の自発的な授業改善のためのシステムとして「授業レポートシステム」を大学として開発し、教員が活用している(文科省[2005], 12頁)。

また、秋田県立大学は、平成13年度から大学が行う全ての授業を対象に、教員個々人の授業改善及びカリキュラムの改善・充実を実施目的として授業アンケートを実施している。平成15年度は、学期毎に2回授業評価を実施し、

44 「授業評価ツールを用いた授業改善とそのフィードバック効果に関する一考察」

調査票についてはFD専門部会が集計・分析を行った後、各教員にデータファイルと併せて返却している。実施結果については、前後期分併せて集計・分析した上で報告書を作成している（文科省[2005]，12頁）。

より積極的な事例として宮城教育大学の取組がある。同大学は、専攻の専門科目はもとよりほぼすべての科目を対象とし、質問項目は全ての授業共通で10項目を5段階評価で行っている。その際、OCR方式により授業評価アンケートを行っている。平成15年度前期・後期授業科目は、約500科目を前期94.95%、後期94.89%という高い回収率で実施している。集計は数値データを専攻・講座ごと、授業科目ごと、学年ごとの3つの視点で行われ、自由記述とともに各教員へ返却されている。さらに、専攻ごとにこれらに関する自己点検・評価を行い報告書を作成し、学生への回答としてホームページで公開している。また、各専攻・講座等の自己評価の報告を踏まえて、大学として全学的に評価を行い、授業の点検・評価結果報告書を作成し、教授会に報告している（文科省[2005]，12頁）。

文科省[2005]のデータではないが、参考までに鹿児島県立短期大学商経学科の事例を紹介しておこう。同学科は、平成7年から半期ごとの授業評価アンケートを実施しており、その結果は大学公式Webサイトに公開されている。具体的な方法は、半期ごとに各授業科目の最終授業（もしくはその1回前）でアンケートを紙媒体で実施し、回収されたアンケートを学内の教職員が集計しWeb上に掲載するというものである³。

独協大学や宮城教育大学の事例を除けば、紙媒体で授業評価アンケートを実施した場合、その集計に手間と時間を要する事は容易に想像できる。仮にマークシート方式やOCR方式を用いたとしても、毎回の授業で授業評価アンケートを行う事はコスト面からも制約がある。したがって、それらの方法では毎時間授業評価を行い、アンケート結果を当該学生に即座に伝達する事は難しいと考えられる。また、学期単位やセメスター単位で実施される授業評価アンケー

3 質問項目は、授業の聞き取り易さ、授業の段取り、教員の学生への対応の丁寧さ、学問への誘い、修得の手応え、および総合評価から構成されている。

トは、当該科目を通した全体の評価であり、毎回の授業の評価とはならない点も問題点の一つとして指摘できる。

Ⅲ. 授業評価システムとその操作方法

紙媒体のアンケートを実施した場合、アンケート用紙の回収後に多くの入力時間と集計時間を要する。学年末に一度だけ行うアンケートの場合はこのような方法でも問題がないと思われる。しかし、毎回の講義でアンケートを行い、その結果を集計・分析して次回の講義に反映させるためには、アンケートの集計・分析が容易に行われるシステムが必要となる。

そこで、今回の授業評価アンケートでは、新川氏（兵庫教育大学大学院）の開発した「授業評価CGI Ver.0.14」（以下、「授業評価ツール」とする）を使用した。

1 授業評価ツールの概要とそのメリット・デメリット

授業評価ツールは、授業評価を行ないその結果をすぐに教員や学生にフィードバックすることを目的として作成されている。インターフェースにはWebが用いられており、プログラミングにあたり言語はPerlが用いられている⁴。学生の回答したデータはサーバーに保存され、教員がそれらのデータを集計する事により、あらかじめ設定しておいた項目ごとに回答分布状況がグラフ表示される事になる。集計結果を示すURLは自動的に生成され、当該URLを学生に伝える事で即時に授業評価結果を提示することが出来る⁵。

授業評価ツールは、即時に集計結果を示す事が可能であることから事務上の負担が軽減されると同時に、学生に対するフィードバックが迅速となるところにメリットがある。また、毎回の授業評価を次回の授業に反映させる事により、

4 汎用性を考慮して「ネットワークやサーバー管理の権限がなくても出来るかぎり授業評価ツールが設置できるようにするため」（新川[2005]、13頁）にこれらのインターフェースと言語を使用している。

5 システムの詳細は、新川[2005]を参照されたい。

46 「授業評価ツールを用いた授業改善とそのフィードバック効果に関する一考察」

教員と学生の双方向でのコミュニケーションが図られ、授業改善に寄与すると考えられる。しかし、毎回アンケートをとることによる授業時間の消費や回答の煩わしさなどがデメリットとして指摘できる。さらに、クリック一つで手軽に回答できることから、安易な回答を誘引する可能性もある。

後掲するように授業評価ツールの機能は、教員と学生をユーザーとして想定して設計されている⁶。

2 授業評価ツールの操作方法

まず、教員の使用できる機能は次の通りである。①科目登録、②質問項目登録、③学生リスト登録（受講生のID,PW設定）、④登録されている質問項目の表示、⑤登録されている学生リストの表示（アンケート回収状況の表示）、⑥アンケート集計、⑦集計結果一覧の表示、⑧CSVファイル（項目集計データ、自由記述集計データ）のダウンロード、⑨集計結果のグラフ表示、および⑩設定や登録を行ったデータの削除。

次に、学生の使用できる機能は次の通りである。①解答する科目の選択、②学生番号の入力、③パスワードの入力、④アンケートへの解答（項目選択、自由記述）、および⑤集計結果の閲覧。

授業評価ツールは、複数の科目や不特定の学生に用いる事が可能であるので、教員は特定の科目のアンケートを取る際に次の事前準備が必要となる。まず、①アンケートをとりたい科目、②履修する学生のIDおよびPW、③質問項目の3つの設定を行う必要がある。次に、アンケートに答えるためのサイト（URL）を学生に知らせる必要がある⁷。

具体的なアンケート実施手続きは次の通りである。①教員は授業終了後に学生に対してアンケートに回答するよう依頼を行う、②指定されたサイトにアクセスするためのパスワードを学生に知らせる、③学生に回答してもらう、④ア

6 具体的な操作画面に関しては、稿末の図表10～21を参照されたい。

7 詳細は後述するが、今回のアンケートの実施では、講義資料やデータをダウンロードするための講義公式Webサイトにアンケートに答えるためのサイトへのリンクを設定した。

ンケートに回答した学生の一覧を確認する。これら一連の手続きを終えた後、教員は集計を行いグラフ化された情報を学生に提示することになる⁸。

IV. アンケートの実施とその結果の分析

1 アンケート方法

アンケートの目的は次の3点に集約される。それらは、コンピュータ会計という科目について、①授業により学生はどのような知識や技術を獲得したのかを把握すること、②学生はどのような視点から授業を評価しているのかを把握する事、および③今後この科目をどのように改善していけばよいのかを把握することである。具体的な質問項目に関しては、丹野[2003]、池田ほか[2002]、有本・山本[2003]等を参照して作成した。

調査票は、授業について尋ねる23項目である⁹。各質問に対して「非常にそう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の4件法で回答を求め、無記名で授業評価ツールを用いて、アンケートを行った。

調査対象者は、2005年度後期に鹿児島県立短期大学商経学科経営情報専攻で開講された「コンピュータ会計」の講義を受講している43名と、(男子学生3名、女子学生40名)であった¹⁰。調査時期は、2005年10月12日から2005年12月14日である。各講義日のアンケート回答学生数は次頁の図表3の通りである。学生は、Web上で提示した調査票を閲覧しながらマウスを用いて毎回の授業終了後に回答しており、アンケートは集団的に実施した¹¹。

2 主因子分析による結果とその考察

2005年10月19日に行ったアンケート結果をもとに、23の質問項目について

8 講義後すぐに結果を提示することも可能であるし、次回の講義に提示することも可能である。

9 調査票は、附表1として後掲している。

10 当該授業は、筆者が担当する科目である。

11 回答画面は図表11を参照されたい。

48 「授業評価ツールを用いた授業改善とそのフィードバック効果に関する一考察」

主因子法による因子分析を行った¹²。対象者は、当日講義に出席した27名（男子学生2名、女子学生25名）である。その結果、固有値の減衰状況から因子番号2までをとることにした。主因子法、バリマックス回転、因子数2による因子分析を行った。次頁の図表4は、2つの因子の因子負荷量を示したもので、因子負荷量の大きい順番に並べ替えてある。第1因子と0.400以上の相関をもつ質問項目は、「Q19」「Q2」「Q20」「Q5」など13項目からなる因子である。第2因子と0.400以上の相関をもつ質問項目は、「Q13」「Q21」「Q17」「Q11」など6項目からなる因子である。両因子に乗らない項目は4個である。なお、累積寄与率は42.864%であった。

図表3 アンケート回答者数

授業実施日	人 数	授業実施日	人 数
10月12日	24人	11月16日	23人
10月19日	27人	11月30日	21人
10月26日	23人	12月7日	19人
11月2日	21人	12月14日	20人
11月9日	21人		

12 分析に際しては、SPSS (Statistical Package for the Social Sciences) を用いた。また、丹野[2003]の分析を参照した。

図表4 アンケートの因子分析

項目番号	質問項目	因子負荷量		因子名
		第一因子	第二因子	
Q19	教員はこの授業に熱心だった	0.786	0.020	第一因子 教員と学生との授業交流効果
Q2	今日の授業は、コース・パケットのスケジュールに沿っていた	0.762	-0.001	
Q20	教員はこの授業の準備を十分にしていた	0.740	0.110	
Q5	今日の講義で使われた教材は有益であった	0.710	0.097	
Q14	教室の設備はこの授業にふさわしいものであった	0.658	0.129	
Q18	教員は学生と効果的にコミュニケーションを行った	0.608	0.241	
Q3	今日の授業の目的ははっきりしていた	0.595	0.128	
Q1	コース・パケットはこの授業を受ける上で役にたった	0.585	0.319	
Q8	教員の話すスピードは適切であった	0.568	0.468	
Q4	今日の授業の出席確認は適切に行われた	0.568	-0.039	
Q7	ディスプレイで提示した資料は適切であった	0.521	0.178	
Q15	大人数授業と違い少人数だからよかった	0.494	0.331	
Q9	教員の話す内容は適切であった	0.443	0.219	
Q13	この授業を受けて学問へのやる気が出た	0.128	0.816	
Q21	私はこの授業をほかの学生にすすめたい	0.118	0.815	
Q17	総合的視野や教養が身についた	-0.168	0.761	
Q11	専門的知識が身についた	0.098	0.700	
Q16	他の授業より真剣に勉強できた	0.319	0.674	
Q12	学問の基礎的な方法論が身についた	0.064	0.572	
Q6	今日のコンピュータ会計は充実した楽しい授業だった	0.231	0.316	
Q10	大学での勉強の仕方がわかった	0.251	0.329	
Q22	私はこの教員を優れた教師であると評価する	0.376	0.358	
Q23	今日の講義では前回のアンケート結果が反映されていた	0.310	0.287	

図表4を見ると、第一因子は、教員の授業に対する熱心さ、設計されたコース・パケットと授業との関係、教材の有益さ、学生とのコミュニケーション、授業方法などについての項目が並んでいる。パソコンを用いた実習形式の中で、

教員とのコミュニケーションを通じた教育・交流効果に関する項目が並んでいると捉える事ができる。そこで、第一因子を「教員と学生との授業交流効果」と命名した。

他方、第二因子は、学問へのやる気や専門知識の獲得など授業を通じて獲得できる知識や技術に関する項目が並んでいると捉える事ができる。そこで、第二因子を「専門知識・技術獲得効果」と命名した。

以上の因子分析の結果から解釈する事ができるのは、コンピュータ会計という科目が、大きく「教員と学生との授業交流効果」と「専門知識・技術獲得効果」という2つの次元から評価されている事である。実習科目としての特性から、教員が90分の間に話している時間より、学生がパソコンを用いて実習を行う時間のほうが比較的多い。したがって、①学生が実習中にどのように教員とコミュニケーションを図る事が望ましいのか、②実習により知識や技術をどのように獲得させるのかといった視点から授業を構成したり改善したりする事が望ましいと考えられる。

3 質問項目ごとの評価結果とその考察

アンケートの目的は、①授業により学生はどのような知識や技術を獲得したのかを把握すること、②学生はどのような視点から授業を評価しているのかを把握する事、および③今後この科目をどのように改善していけばよいのかを把握することであった。したがって、以下では、各回で集計されたアンケート項目についてその推移を分析する。具体的には、(2)で行った主因子分析の結果を基礎として、第一因子と第二因子にそれぞれ所属する項目の平均値をグラフ化した。また、両因子にのらない項目についてもそれらの平均値の推移をグラフ化した。アンケート項目は、4件法で回答を求めたが、分析上「非常にそう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の順に、1, 2, 3, 4と得点を与えている。したがって、平均値が1に近づけば近づくほど授業改善が行われたと判断できる。

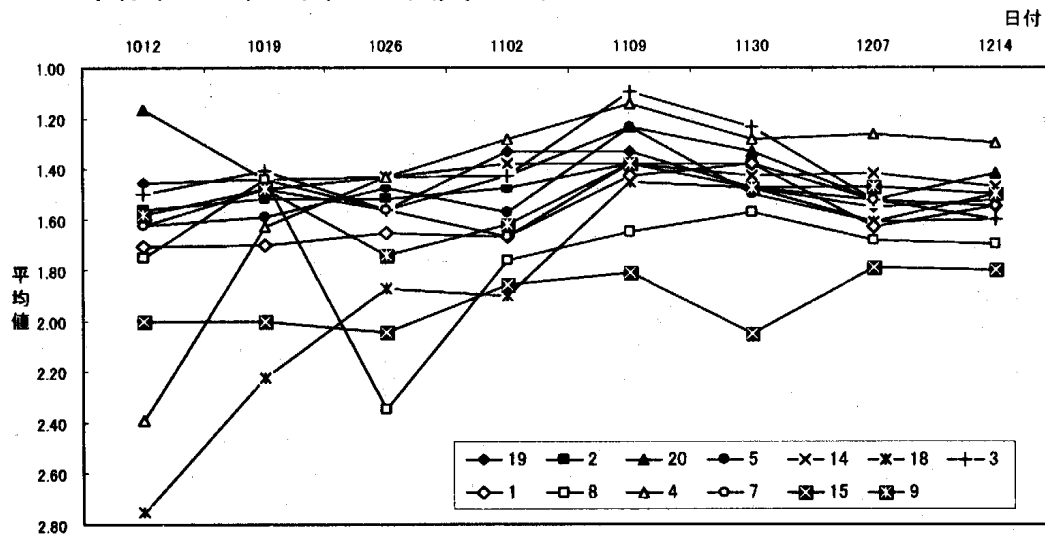
まず、図表5は、「教員と学生との授業交流効果」と命名した第一因子に属

する質問項目の平均値の推移である。図表5より明らかなように、講義の初回である10月12日の各項目の平均値は項目間でばらつきがあり、平均値も2点以上のものがある。しかし、10月12日に回収したアンケート結果を次回の10月19日の講義で反映させたことから、幾つかの項目に関しては、平均値が1に近づいていることが読み取れる。以下、同様に11月9日までの間に平均値は1に近づいていく事が読み取れる。その後は安定した評価を得ている事から、学生の改善要求を満たした後は、授業への評価が一定となると考えられる。

次に、図表6は、「専門知識・技術獲得効果」と命名した第二因子に属する質問項目の平均値の推移である¹³。図表5で示された第一因子と比較して、第二因子は、「専門知識・技術獲得効果」に関するものである事から、授業改善の成果はより顕著に現れている。

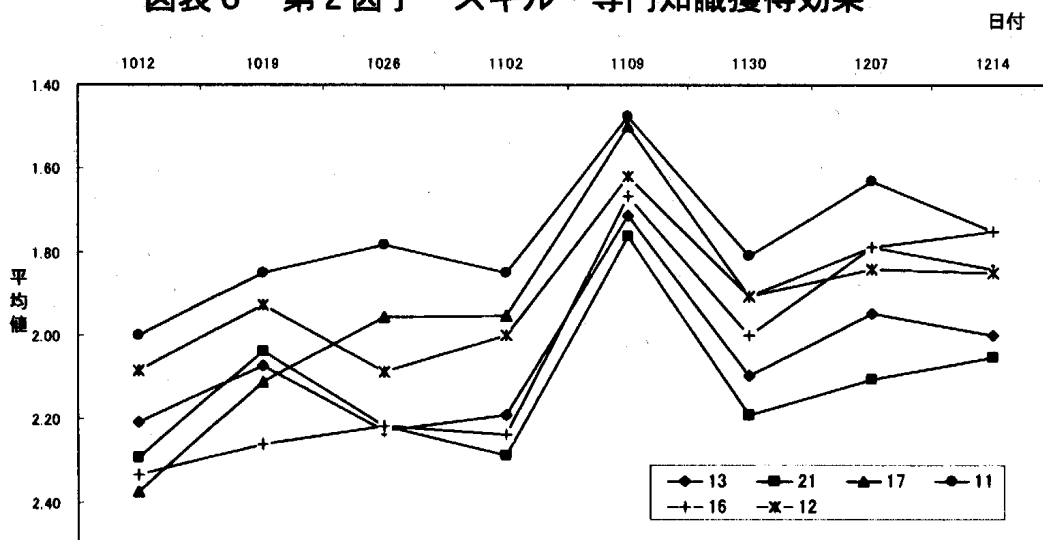
図表7は、両因子に乗らなかった項目の平均値の推移である。図表5と6同様に、授業を重ねるごとに平均値は1に近づいている事が読み取れる。

図表5 第1因子 教員との交流効果に関する平均値の推移

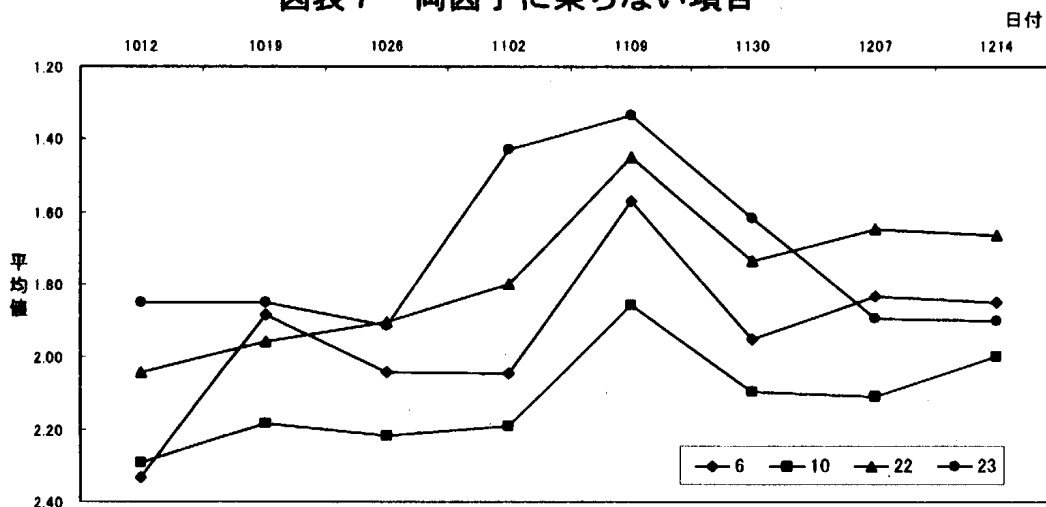


13 なおグラフより、小テストを行った日という理由により、11月16日に行ったアンケート結果は除外している。小テスト後に評価平均が下落している事から、小テストの実施時期やその効果についても検討の余地がある。

図表6 第2因子 スキル・専門知識獲得効果



図表7 両因子に乗らない項目



4 授業改善方法の検討

次の図表8は、各授業日に学生から得られた自由記述の内容をまとめたものである。一見して判読できるように、授業回数を経るごとにコメント数は減少している。教員側が学生のコメントを授業に反映させたり、反映しない理由を述べたりする事で双方向でコミュニケーションを図る事ができたことを示している。

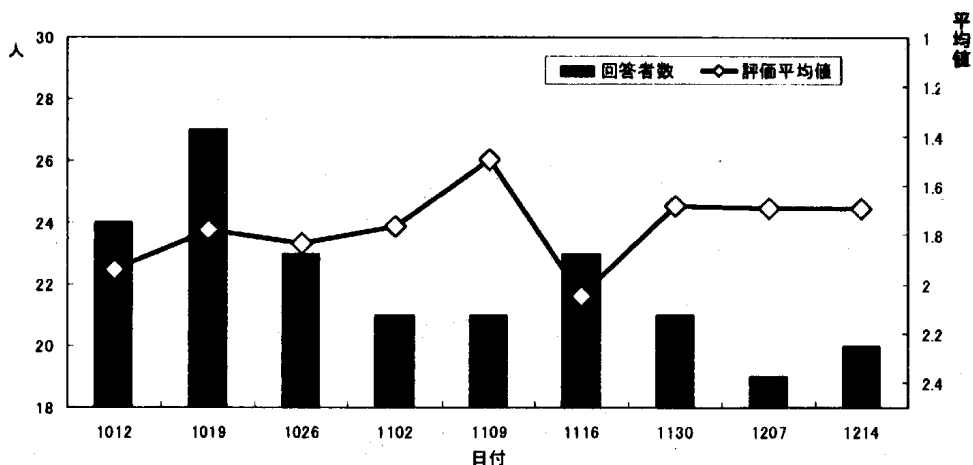
図表 8 授業評価における自由記述内容

講義日	コメント数	コ メ ン ト
10月12日	11	①話もとてもわかりやすく、プリントもわかりやすかったです。ただお昼あとで少し眠くなってしまうので、寝ないためにもできればもっとプリントの穴埋めを増やしてほしいです。 ②特にないです。 ③特にありません。 ④今日は簿記の授業ととても関連があったので、簿記の復習にもなってよかった。 ⑤特にないです。 ⑥話を聞いてばかりだったので、時間帯のことも重なりかなり眠かった。 ⑦先生の話すスピードを少し落として講義していただくと助かります。 ⑧私が後ろの席にいたというのも悪いと思うのですが、声が聞こえづらいでした。できればマイクを……。 ⑨今日と同じように授業を進めてもらえたらいいです。 ⑩今回は特にありません。 ⑪資料はよかったのですが話が長く、後半少し眠くなりました。実際に問題を解きながらだったら、面白いと思いました。
10月19日	5	⑫特にないです。 ⑬エクセルであまり理解できなかったことが今日の授業で理解できたと思う。 ⑭エクセルのテクニック系は良いと思った。先週、ダウンロードしておきなさいといわれたNTTの貸借対照表とかはもう使わないんですか？ ⑮前回より興味の持てる内容だった。役に立つと思う。 ⑯知らないことが多かったのでとても為になりました！！ ⑰エクセルの使い方はもう少し早くしても大丈夫だと思いました。
10月26日	1	⑱分析の計算方法を色々と覚えられたりすると、これから役に立つことがあると思いました。
11月 2日	0	
11月 9日	1	⑲グラフの作成で手いっぱいになってしまっていたので、今回は早く作成し分析の方を頑張りたいです。
11月16日	1	⑳テストが難しかったので、日頃からこつこつ勉強しなければいけないなと思った。
11月30日	0	

12月 7日	1	②過去の分の空白部分の回答を載せてほしい。
12月14日	2	②実践（実際のデータを用いた実習：筆者注）のときに分析のコメントがうまくできません。ポイントがあったら教えていただきたいです。 ③実践をやっていると、いろいろ疑問が出てきて大変ですが、質問する時間がありません。実践をやりつつ質問をしてはいけませんか？

10月12日から11月9日の間の講義では、講義開始前や講義中に学生から得られた授業改善項目を紹介したり、その内容を授業内容に組み込んだりした事が改善をもたらしたと考えられる。とりわけ11月9日の講義では、前回の復習を丁寧に行い、獲得した専門知識を活用して実習を行うという形式で授業を展開したり、特に学生への負担を軽減するために授業内容量を減らし余裕を持って実習を行える時間を与えたりしたことにより、授業改善が顕著であったと考えられる。いずれも学生の評価をフィードバックした事により授業改善につながったと考えられる。なお、授業評価者数と評価平均値の推移は図表9のとおりである。

図表9 授業評価者数と評価平均値の推移



V. おわりに

本稿は、期末に一度だけ行われる授業評価が学生に対する間接的なフィードバックである事を解決するため、直接的なフィードバックを可能とする方法について検討を加えた。その結果、Webサイトを用いた授業評価ツールは、集計・分析に要する時間を削減することを可能とすることから、毎回の講義で使用する場合に有用な授業評価ツールの一つであると結論付けられた。

また、具体的なフィードバック効果を検証するために、鹿児島県立短期大学商経学科の学生を対象としたアンケート調査を行った。その結果を基礎として、学生に対する授業評価のフィードバック効果と授業改善状況の分析を行った。コンピュータ会計という科目が、大きく「教員と学生との授業交流効果」と「専門知識・技術獲得効果」という2つの次元から評価されている事が分析され、個別の授業評価項目の平均値の推移から授業改善に必要な要素が導き出された。

しかし、教員側の視点で授業改善方法の検討を考えた場合、アンケート結果を外部に公開するか否かといった問題が発生してくることも事実である。教員が授業評価の公開に抵抗を感じる場合も想定されるからである。具体的には、教授方法の優劣の公開や安易な授業評価への抵抗がその理由として考えられる。授業評価が①学生に対する教育効果向上を目的として行われており、②教員自身が授業改善を行うための評価反省の資料として活用する事を目的としていることを考慮すれば公開・非公開は重要な問題ではない。

本稿で行ったように、毎回の授業評価結果を公開する必要性は必ずしも無いであろうが、半期ごとに行われる授業評価に関しては、将来や過去の受講生に向けての情報開示という視点から有意義であろう。教員本人が授業改善を行う事や学生へのフィードバックに勤めることは当然として、授業評価結果の開示等については、大学教育活性化という視点からも今後検討の必要性があろう。

図表10 授業評価アンケートトップページ

授業評価アンケート

授業評価アンケート、学生認証のページです。
回答する科目を選択して、学籍番号、パスワードを入力してください。

科目	<input type="text" value="選択"/>
学籍番号	<input type="text"/>
パスワード	<input type="password"/>
<input type="button" value="送信"/>	

※このアンケートは個人を特定しない数値になっています。
※学籍番号は他の学生との重複回答を避けるために入力を求めています。
※教員は入力した学籍番号や回答を特定することが出来ないシステムになっています。
※このアンケートで得られた情報は授業改善と研究目的にのみ使用されます。

- 授業評価CGI v0.14 -

図表11 学生が回答を行うサイト

コンピュータ会計 アンケート

次の質問に答えて、最後に「送信」ボタンを押してください。

問1 コース・パッケージはこの授業を受ける上で役にたった

- 非常にそう思う
- ややそう思う
- あまりそう思わない
- 全くそう思わない

問2 今日の授業は、コース・パッケージのスケジュールに沿っていた

- 非常にそう思う
- ややそう思う
- あまりそう思わない
- 全くそう思わない

図表12 アンケート管理メニュー画面
アンケート管理メニュー

登録状況

現在登録されている科目	質問項目	学生リスト
コンピュータ会計	OK	OK

科目設定

- 科目登録
- 質問項目登録(登録あり)
- 学生リスト登録(登録あり)

アンケート管理

- 現在登録されている質問項目
- 現在登録されている学生リスト
- アンケート集計

戻る

- 授業評価CGI v0.14 -

図表13 科目登録画面

科目登録

科目名、科目IDを入力して送信ボタンを押してください。科目IDは、重複しないものを入力してください。

科目ID	科目名
2005comacc	コンピュータ会計

科目名

科目ID ※半角英数字とアンダーバーのみ使用できます

- 授業評価CGI v0.1

図表14 質問項目登録画面

質問項目の登録

科目を選択して、問題文を入力してください。

科目名

問題

- 授業評価CGI v0.14 -

図表15 学生リスト登録画面

学生リスト登録

科目と登録する学生のリストファイルを選択してください。

科目名

学生リスト

- 授業評価CGI v0.14 -

図表16 登録済みアンケート項目の確認

現在登録しているアンケート項目の確認

科目を選択してください。

科目名

- 授業評価CGI v0.14 -

図表17 登録済みアンケート項目確認画面 (2)

コンピュータ会計 アンケート項目

現在、コンピュータ会計には次の質問と項目が準備されています。

問題	回答項目			
コース/バケットはこの授業を受ける上で役にたった	非常にそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
今日の授業は、コース/バケットのスケジュールに沿っていた	非常にそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
今日の授業の目的ははっきりしていた	非常にそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
今日の授業の出席確認は適切に行われた	非常にそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない

図表18 登録されている学生状況確認画面

登録状況の閲覧

科目と登録する学生のリストファイルを選択してください。

科目名

- 授業評価CGI v0.14 -

図表19 登録者リストと集計状況確認画面

コンピュータ会計 登録者リスト

アンケート欄は、アンケートに答えた人のみ「済」と表示されます。

教員メニューの【回答集計】を行うと「済」は消えます。/RESULT/2005comacc/6222.txt

氏名	学籍番号	パスワード	アンケート
1	1111	0000	済
2	2222	0001	
3	3333	0002	済
4	4444	0003	

図表20 集計結果レポート確認画面

集計を行う科目を選択してください。

- 授業評価CGI v0.14 -

図表21 集計一覧確認画面

現在、集計が終わっているデータを表示しています。

1アンケートにつき、2ファイル存在します。
各項目の回答が項目集計データ、自由記述が自由記述集計データです。
ファイル名の日時は、集計を行った日時をあらわします。。
集計をまだしていない場合は、何も表示されません。

集計日時	科目名	ファイルタイプ	グラフ	削除
2005年12月14日 (Wed) 18:28:35	コンピュータ会計	自由記述集計データ		
2005年12月14日 (Wed) 18:28:35	コンピュータ会計	項目集計データ		
2005年12月07日 (Wed) 14:14:30	コンピュータ会計	自由記述集計データ		
2005年12月07日 (Wed) 14:14:30	コンピュータ会計	項目集計データ		

附表1 アンケート項目一覧

項目番号	質問項目
1	コース・パケットはこの授業を受ける上で役にたった
2	今日の授業は、コース・パケットのスケジュールに沿っていた
3	今日の授業の目的ははっきりしていた
4	今日の授業の出席確認は適切に行われた
5	今日の講義で使われた教材は有益であった
6	今日のコンピュータ会計は充実した楽しい授業だった
7	ディスプレイで提示した資料は適切であった
8	教員の話すスピードは適切であった
9	教員の話す内容は適切であった
10	大学での勉強の仕方がわかった
11	専門的知識が身についた
12	学問の基礎的な方法論が身についた
13	この授業を受けて学問へのやる気が出た
14	教室の設備はこの授業にふさわしいものであった
15	大人数授業と違い少人数だからよかった
16	他の授業より真剣に勉強できた
17	総合的視野や教養が身についた
18	教員は学生と効果的にコミュニケーションを行った
19	教員はこの授業に熱心だった
20	教員はこの授業の準備を十分にしていた
21	私はこの授業をほかの学生にすすめたい
22	私はこの教員を優れた教師であると評価する
23	今日の講義では前回のアンケート結果が反映されていた
	自由記述

主要引用・参考文献

- Davis, B. G., L. Wood and R. Wilson[1983]: *ABC's of Teaching with Excellence*, California, The Regents of the University of California (香取草之助監訳[2005]:『授業をどうする! カリフォルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集』東海大学出版会)。
- Kornhauser, A. W.(Revised by Dine M. Enerson)[1993]: *How to Study: Suggestions for High School and College Students(Third Edition)*, Chicago, Illinois, University of Chicago Press (山口栄一訳[2005]:『大学で勉強する方法』玉川大学出版)。
- 有本章編[2003]:『大学のカリキュラム改革』玉川大学出版部。
- 有本章・山本眞一編著[2003]:『大学改革の現在』東信堂。
- 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹[2002]:『成長するティップス先生—授業デザインのための秘訣集』玉川大学出版部。
- 井下理[2003]:「『学生による授業評価』とカリキュラム改革—慶応義塾大学SFCにおける事例から」, 有本章編[2003]:188-205頁。
- 上原麻子[1989]:「講義への学生参加—短大の「教育原理」—」, 片岡徳雄・喜多村哲郎編[1989]:185-199頁。
- 鹿児島県の高等教育を考える商経学科教員集団編著[2002]:『地域に根ざし地域を活かす大学』(鹿児島県立短期大学地域研究所叢書), 鹿児島県立短期大学地域研究所。
- 片岡徳雄・喜多村哲郎編[1989]:『大学教授の研究』玉川大学出版部。
- 小林康夫・船曳建夫編[2004]:『知の技法』東京大学出版会。
- 斉藤悦則[2002]:「あるべき大学像の考察 I 独創的な公立大学へ」, 鹿児島県の高等教育を考える商経学科教員集団編著[2002]:105-127頁。
- 新川健一[2003]:「携帯電話による授業評価ツールの開発」, 兵庫教育大学修士論文, 1-32頁。
- 武内清[2003]:「学生と大学改革」, 有本章・山本眞一編著[2003]『大学改革の現在』東信堂, 119-138頁。

62 「授業評価ツールを用いた授業改善とそのフィードバック効果に関する一考察」

丹野義彦[2003]:「アンケート —基礎演習を自己検証する—」, 小林康夫・船
曳建夫編[2004]:44-61頁。

藤永弘他[2001]:『21世紀の大学像と会計教育の研究』(日本会計研究学会ス
タディ・グループ最終報告), 日本会計研究学会。

松尾太加志・中村知靖[2002]:『誰も教えてくれなかった因子分析—数式が絶
対に出てこない因子分析入門—』北大路書房。

三土修平[2002]:『数学の要らない因子分析入門』日本評論社。

室淳子・石村貞夫[2002]:『SPSSでやさしく学ぶ多変量解析[第2版]』東
京図書。

室淳子・石村貞夫[2005]:『SPSSでやさしく学ぶ統計解析[第2版]』東京
図書。